

日本経済新聞 夕刊 2008年2月1日(金)

「消防隊員用ウェアラブル赤外線カメラ」

なるほどビジネス Photo



モニターと一体型の「ウェアラブルカメラ」④がとらえた赤外線画像

災害現場の消防隊員が見る赤外線画像をリアルタイムで指揮本部に電送、状況を分析して救助・消火活動を支援……。そんな「ハイテク消防」がまもなく実現する。

総務省消防研究センター、横浜市安全管理局、NEC三栄(東京都立川市)が共同開発した「消防隊員用ウェアラブル赤外線カメラ」だ。ヘルメットに装着したカメラが映す赤外線画像をマスク内の二寸四方の小型モニターに表示する。充満した煙で視界の悪い現場でも熱源を感知し、火元や行

なるほど
ビジネス
Photo

救助スムーズ「ハイテク消防」

方不明者の特定が容易になる。同時に無線LAN機能で映像を外部に送信する。従来の赤外線暗視スコップは手に持たなくてはならなかったり、放水による水蒸気でモニターが結露するなど現場での使用が難しかった。

課題はコスト。小型の赤外線カメラが高価なため装備一式の製作費用は一ト百五十万円以上かかる。横浜市安全管理局の開発担当者「災害現場で視界確保という利点は計り知れない。量産による低価格化に期待したい」と話す。